

研究報告 4

英文の内容理解を基に自己表現ができる生徒の育成
－インテイクを充実し、英語を話すことへの抵抗感を軽減するための工夫－

愛知県立豊田西高等学校 教諭 今田 祐之

1 はじめに

本校英語科では、平成 21 年度から新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善に取り組んでいる。英語を用いた授業展開は定着してきており、改善は一定の成果を上げている。特に、平成 22 年 3 月には、以下のように、英語 I・英語 II の授業に関する英語科教員全員の共通理解事項を設定するに至った。

授業展開	目的	活動例
①pre-reading	スキーマの活性化 (教科書の題材についての予備知識を与えるなどして、本文を読みたいという気持ちにさせる。)	<ul style="list-style-type: none"> ・内容についてのオーラル・イントロダクション ・写真や絵を用いた活動 ・新出単語の導入
②while-reading	概要把握→理解→内在化 (トップダウン方式で速読をさせたあと、より深く教材を理解させる。その後、その教材を「使えるレベルまでインプット」＝「インテイク」させる。)	<ul style="list-style-type: none"> ・リスニングによる Q－A ・速読による内容把握 (概要確認のために Q－A 等) ・スキミング, スキミング (True or False 等で) ・推論発問による本文のメッセージについての深い読み (論説文の場合, 文章の構成にも着目) ・文法事項確認 (一部和訳も) ・サイト・トランスレーション ・シャドーイング ・絵やチャート等を用いた Story の Retelling と Writing ・本文の内容を英語で要約
③post-reading	表現活動 (アウトプット活動を通して教材と自己を結びつける personal involvement を目指す。)	<ul style="list-style-type: none"> ・レッスンを通じて最も印象に残った点や興味をもった点を挙げさせ、これに関連して自分が更に調べたい点を絞らせ、調べ学習 → 発表 ・筆者の意見に賛成か、反対かをまとめさせ、議論 ・自分が主人公の立場だったらどうするかをまとめさせ、発表 ・教科書の内容に関連した他の英文を読ませ、相違点や類似点をまとめさせ、発表

しかし、まだ生徒に十分な英語によるコミュニケーション能力を身に付けさせているという実感はない。特に「英語を話すこと」に関しては不十分であると感じている。本研究では、読み取った内容を基にいかに関自己表現をさせるかを考えながら、英文のインテイク量を増やし、英語を話すことに結び付ける授業方法を探っていきたい。

なお、本研究では「インプット」と「インテイク」の2語を次のように定義して使用する。

- ・インプット … 言語情報に触れること。
- ・インテイク … 自分に必要なものとして認識された言語情報を、使用できるよう理解して知識体系の中に取り込むこと。

2 生徒の実態

本校第1学年生徒320名に対し、英語の4技能に対する意識調査をした（平成24年4月実施）。

①得意か不得意か

	得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば不得意	不得意
読むこと	16.9%	41.9%	32.2%	9.1%
書くこと	12.5%	33.8%	40.9%	12.8%
聞くこと	15.6%	26.3%	38.1%	20.0%
話すこと	10.6%	22.2%	39.7%	27.5%

②抵抗感の有無

	ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
読むとき	6.9%	22.2%	39.4%	31.6%
書くとき	6.9%	23.8%	36.6%	32.8%
聞くとき	11.6%	24.7%	34.1%	29.7%
話すとき	19.7%	29.1%	29.1%	22.2%

③自分の英語力で弱い力

	一番目	二番目
読む力	9.5%	11.9%
書く力	21.5%	25.5%
聞く力	29.0%	27.0%
話す力	40.1%	35.5%

④自分の英語力で伸ばしたい力

	一番目	二番目
読む力	11.7%	16.2%
書く力	9.5%	21.9%
聞く力	17.4%	41.0%
話す力	61.5%	21.0%

①の結果より、生徒は英語を話すことが最も不得意と感じており、その数は「不得意」と「どちらかといえば不得意」を合わせると約3分の2にも上る。そのため、英語を話すときに感じている抵抗感は、②に示されているように、他の3技能に比べて強いようだ。そして、③、④からは、生徒が4技能の中で話す力が一番弱いと感じており、この話す力を最も伸ばしたいと感じていることが分かる。

3 研究の目的

英語の授業の中で、まとまった量の英語を、生徒が自信をもって話すようにさせるには、次のような段階的な指導が効果的であると考えられる。

英文読解 → 英文のインテイク → インテイクした英文を用いた自己表現（書く活動→話す活動）

まず第1段階として、英文の内容を正確に理解し、著者の主張やメッセージを積極的に読み取れるような問いについて考えたい。第2段階として、内容を読み取った後に、音読や暗唱練習を繰り返すことで英文をインテイクさせ、英語表現力の向上を図る。そして、第3段階として、読み取った英文の内容に関連する事項についての自己表現活動を取り入れる。この際、インテイクした英文をなるべく多く使うよう促す。また、事前に原稿を作成させて添削し、正しいと自信をもって発表できる英文を完成させる。そして音読等の練習時間を十分に与えてから発表させることで、英語を話す際の抵抗感を軽減させたい。

【目指す生徒像】

英語でコミュニケーションを図ることに意欲的で、学んだことを基に自己表現ができる生徒

4 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立て検証することにした。

仮説1：英文の内容理解について、段階的な問いの工夫をすれば、生徒は積極的に内容を理解しようと努め、また、登場人物の心情や筆者のメッセージを正確に把握することができるだろう。

仮説2：英文のインテイクのための活動を充実させれば、生徒はまとまった量の英文を書くことができ、自分の英語表現力が向上したと感ずることができるだろう。

仮説3：自分が書いた英文を発表するための準備や練習を充実させれば、生徒は抵抗感をもたずに堂々と英語で話すことができるだろう。

5 研究の方法

研究の仮説を検証するため、第1学年英語Iの授業において以下の方法で実践を行うことにした。

(1) 英文の理解に関する手だて

ア ワークシートを用いた段階的読解の支援…**手だてA**

- (ア) 概要把握から詳細理解へと導く設問を示す。
- (イ) 前後関係から空所を補充させるなど、積極的な読解を促す。
- (ウ) 文法事項を含めた、細部までの理解を求める。

(2) 英文のインテイクに関する手だて…**手だてB**

- ア センス・グループごとにスラッシュを引き、一つのまとまりとして認識させる。
- イ 英文と日本語を左右に配置し、Sight Translationができるようにする。
- ウ 繰り返し音読させたり、覚えた英語を書かせたりして、確実な定着を図る。

(3) 自己表現活動（アウトプット活動）の準備と練習…**手だてC**

- ア インテイクした英文を活用し、内容理解に基づいた自己表現ができるようなテーマを設定する。
- イ 書く活動を行ってから、話す活動へとつなげる。
- ウ 発表する前に十分に練習をさせ、抵抗感を軽減させる。

(4) アンケートによる生徒の達成状況の把握

単元終了後に、授業の取組や学習目標の達成度に関する自己評価アンケートを実施し、その結果を分析する。

(5) 単元構想

1 単元名 Lesson 4 Yukina's Message: Until the Battery Runs Out			
2 単元の目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・単元で扱われている内容に関心をもつとともに、ペア・ワークに積極的に取り組む。 ・読んだことに基づき、由貴奈さんの母親になったつもりで、送られてきたキルトについて報告する手紙を由貴奈さんに書く。 ・上記の手紙を、由貴奈さんに語りかけるように音読する。 ・登場人物の言動やその言動の理由などを捉えることを通じ、本文の概要や要点を理解する。 ・他の生徒の発表を聞いて正しく理解し、感想を伝える。 ・過去完了形、関係代名詞 what の意味や用法を理解する。 			
3 単元の評価規準			
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
・単元で扱われている内容に関心をもつとともに、ペア・ワークに積極的に取り組んでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・読んだことに基づき、由貴奈さんの母親になったつもりで、送られてきたキルトについて報告する手紙を、由貴奈さんに書くことができる。 ・上記の手紙を、由貴奈さんに語りかけるように音読できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の言動やその言動の理由などを捉えることを通じ、本文の概要や要点を理解することができる。 ・他の生徒の発表を聞いて正しく理解し、感想を伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・過去完了形、関係代名詞 what の意味や用法を理解している。
4 単元の概要と言語活動			
<p>本単元は、5年以上に及ぶ闘病生活の末、小児ガンのため12才で亡くなった宮越由貴奈さんについての話である。由貴奈さんの闘病生活の様子と、その中で彼女が感じた命の大切さや助け合うことの重要さが、「命」の詩の背景にあることが述べられる。まず登場人物の言動やその言動の理由等を捉えて本文の内容を理解する。最終的には、彼女の母親になったつもりで、本文の内容を要約しながら由貴奈さんに当てた手紙を書き、適切に音読する活動を行い、相手に伝える力を養う。</p>			
5 単元の指導計画（全11時間）※1時間：50分			
	学 習 活 動（生徒）	言語活動に関する指導上の留意点（教師）	
第1次 (0.5)	【イントロダクション】 ・教師のオーラル・イントロダクションを聞いた後、「命」の詩を読む。本文や詩の内容とともに、キルトの制作者が誰なのかについても関心をもつ。	・本文や詩の内容とともに、キルトの制作者が誰なのか関心を湧きたてる。	
第2次 (7.5)	【Part 1～4 の内容理解、音読、暗唱】 ・本文を読み、Task 1, 2 の質問に答える。追加の質問にも英語で答える。	・空所補充のワークシート（資料6）を用いて答えさせ、さらに理解を深める質問を口頭で行う。 手だてA	

<p>第3次 (3)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・過去完了形，関係代名詞 what，及びその他の重要表現を学習する。 ・センス・グループごとに教師の後に続いて音読し，次に暗唱できるまで練習する。 <p>【手紙を書く→音読する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・与えられた条件で手紙を書く。 ・音読の練習をする。 ・ペアで発表しお互いを評価する。ペアを変えて再度行う。最後に，グループや全体で代表者が発表する。 ・自己評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・予習用ワークシートを用いて新出語句の確認や文法事項の説明を手短に行う。 <p>手だてA</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Buzz Reading, Read and Look Up など様々な方法を用いる。 <p>手だてB</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作文用ワークシート（資料7）を用いる。 ・手紙の内容について含めるべき情報を与え，生徒が暗唱した英文を使えるようにする。 <p>手だてC</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習時間を十分設け，話すことへの抵抗感を軽減させる。 <p>手だてC</p>
--------------------	---	--

6 学習活動と新学習指導要領との関連

- 読んだことに基づき，由貴奈さんの母親になったつもりで，送られてきたキルトについて報告する手紙を，由貴奈さんに書くことができる。

エ 聞いたり読んだりしたこと，学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどについて，簡潔に書く。
(コミュニケーション英語Ⅰ 2(1))

- 登場人物の言動やその言動の理由などを捉えることを通じ，本文の概要や要点を理解することができている。

イ 説明や物語などを読んで，情報や考えなどを理解したり，概要や要点をとらえたりする。また，聞き手に伝わるように音読する。
(コミュニケーション英語Ⅰ 2(1))

7 言語活動の充実の工夫

【授業の流れ】

第1次＝スキーマ活性化
(イントロダクション)

→

第2次＝内容理解＋暗唱
(インプット，インテイク)

→

第3次＝アウトプット
(英作文と音読)

本単元では，内容を理解するだけでなく，理解したことに基づいて英文をアウトプットさせることをねらいとしている。その英文も，書く内容を指定することで，本文中に出てきた出来事を要約したり，登場人物の気持ちを考えたりするなど，内容理解の一端を担っている。

また，本文の内容を主に書くため，本文をインテイクできていれば，その表現を使って作文することが可能となる。授業内でしっかりと練習していれば，それほど苦勞なく英文を書けるだろう。

最後に，書いた英文を相手に音読するのだが，ほとんどが本文中に出てきた表現であるため，既に音読練習が終わっている語句が多い。このため，音読する際も心理的障壁は低いだろう。

【第3次の指導内容と留意点】

- ① 〈本文を見ずに書く〉覚えた英文を実際に使ってみる。
- ② 〈与えられた設定で構想を考える〉感情を表現するところは特に注意する。
- ③ 〈ペアの相手に音読する〉聞き手は評価シートで評価し，コメントを記入する。
- ④ 〈ペアを変えて繰り返す〉1回目の評価を基に，修正すべき箇所は修正する。

6 研究の実際と考察

(1) 英文の理解

初見の文章の概要把握（前後関係に注意して読む） → 著者のメッセージ読み取り → 細部の理解

今回取り入れた空所補充問題（Task 1）は、字面だけ追うのではなく、英文をじっくりと読み、話の流れや前後関係を把握しなければ解けないよう工夫した。例えば Part 4 の、由貴奈さんの人生について説明されている箇所、以下のように空欄を埋めることを求めた。

Yukina's life was short, but she had lived on until life said, "I'm ()."

この空欄に入る語は tired であるが、これは「命」の詩の中に含まれる表現から著者が引用してきているものである。最初は答えが分からなかった生徒も多かったが、“You can find the answer if you read Yukina's poem again.”というヒントを与えたところ、大部分の生徒が正しく解答できた。

また、概要把握の後、各パートにおいて、筆者の最も伝えたい内容は何かを考えさせた。例えば Part 1 に、this message や her message という表現があり、由貴奈さんが伝えなかったそのメッセージは何かを、英語 4 語で答えるよう出題した。本単元のタイトルも“Yukina's Message”であり、このメッセージの中身を捉えることが内容理解の上で最も重要なことであると考えたからである。答えは how important life is であるが、多くの生徒がこの答えかそれに近いものを書いていた。

これらの活動に対する生徒の取組状況は良好で、解答後、ペアで答えを比較させたところ、解答の根拠を熱心に説明し合う姿が見られ、積極的な読解ができていると感じられた。また理解が不十分と思われた箇所については、英問英答問題も数問追加し、生徒の内容理解を助けた。

その後、複雑な構造の文や新出文法項目等について説明して、各文の完全な理解を促した。これで内容と文構造の両方の理解が確認され、暗唱の準備が整った。

(2) 英文の暗唱（インテイク）

読み方	回数・時間	目的・留意点
ペア読み	1 回	ペアの片方が読む。お互いに発音できない語をチェックする。
範読に続いての読み	1 回	分からなかった語の発音を確認し、教師に続いて繰り返す。
Buzz Reading	2 回	範読を基に、正しい発音で読みの練習をする。
Read & Look Up	1 回	教師がセンス・グループごとに英文を読んでいるときは本文を見て確認し、自分で発話するときは顔を上げる。
Sight Translation	4～5 分	ワークシートの日本語のみを見て英語にできるかを確認する。
ペアで暗唱確認	1 回	ペアの相手に Sight Translation を確認してもらう。

左半分は英文、右半分は日本語の文を配置したワークシートを使用して音読を行った。日本語の部分には、英文の語順に合わせたセンス・グループごとの訳を示した。生徒には、その日本語文のセンス・グループごとに引かれているスラッシュを参考にして英文にもスラッシュを書かせ、意味のかたまりを把握させた。

その後、ペア読みでお互いに発音できない語をチェックさせた。範読でその語の発音を確認させ、Buzz Reading, Read & Look Up, Sight Translation などを行い、日本語を見て英文が言えるようになるまで練習させた。最後に、ペアで暗唱確認をさせた。

どれも年度当初から行っている活動であるため、生徒も慣れており、取組状況も良好であった。また、次の自己表現活動では教科書やワークシートを見ずに手紙を書く活動を行うことを繰り返し伝えたので、生徒は熱心に取り組んでいた。

(3) 自己表現活動（アウトプット活動）の準備と練習

作文(100語程度, 30分) → 教師による添削 → 修正 → 音読練習(重点項目の確認)
→ ペアで発表・相互評価(2回) → グループで代表者1名発表・評価 → 代表者2名が全体発表

作文の課題は、「由貴奈さんの母親になったつもりで、天国の由貴奈さんに手紙を書く」こととして、授業中に取り組みさせた。手紙に含めるべき内容は、以下の4点とした。

- ・彼女の詩「命」が刺繍されたキルトを受け取ったこと。
- ・そのキルトを作った人たちと作った理由について。
- ・そのキルトを受け取った後、自分は何をしたか。
- ・そのキルトを受け取って、自分は何を感じたか。どう感じたか。

この内容をきちんと手紙に書くことができれば、本文の内容を正確に理解できており、本文の要約が英語で書けることにもなる。また、「自分は何を感じたか」の部分表現するには、母親の心情を正確に読み取っている必要がある。このように、読んだ内容に基づいて、自己表現ができるよう工夫した課題を設定した。

また、英文暗唱の成果を試すため、生徒には教科書やワークシートは見ずに手紙を書くよう指示した。暗唱した英文を、人称を変えたり時制を変えたりしながら、実際の場面で使用させるよい機会となった。大部分の生徒が、90～130語程度の手紙を、約30分で書き終えることができた。

この出来上がった原稿はすべて添削した。

【資料1 生徒の作文例】

文法的な間違いが多い英文をインプットさせても、英語表現力向上に必要な「自分のものとして使える正しい英文」量を増やすことにはならない。生徒も自分が書いた英文が正しいか、通じるかを確信できないまま発表するのは不安を感じるはずである。今回の活動については、自信をもって発表できるよう添削指導が必要と判断した。

資料1は、生徒の作文例である。文法的な誤りについては添削をしたが、手紙の構成には手を加えていない。下線部が、本文の表現を利用している箇所である。暗唱した表現をたくさん使用しており、内容的にも申し分ないものが出来上がった。

添削した作文を生徒に返却し、訂正すべき箇所は直させた後、音読の練習のため20分ほど時間を与えた。練習開始の前に、発表時には以下の観点から聞き手が評価をすることを伝え、練習する際の重点項目とするよう伝えた（資料2

評価シート参照）。

- ・手紙をなるべく見ずに発表すること。
- ・由貴奈さんの母親になったつもりで、由貴奈さんに語りかけるように発表すること。
- ・相手が分かりやすいように、ゆっくりと、はっきりと発音すること。

Dear Yukina

A long time has passed since you are gone. I'm doing fine.

By the way, we received a quilt on which your poem was embroidered. Elementary school students gave it to us. Their teacher was worried about the bullying in her class. She wanted them to understand the preciousness of their lives. So she read the poem to her students and they realized how important life is. They wanted to do something to thank you and they made the quilt.

After I got it, I sent them a beautiful bouquet with a letter in place of you. I was very glad that your message touched their hearts. I hope that your message will spread from person to person and you continue to live on in all of us.

練習後、ペアを組んでお互いに発表させ、評価をさせた。その後、ペアを変え再度、発表と評価を行った（資料3，4）。次に4人グループになり、代表者1名が発表し、残り3名が評価をした。最後に、クラス全体の前で2名に発表をしてもらった。この際は、評価はさせなかった。

【資料2 評価シート】

Evaluation Sheet for Post Reading of Lesson 4

Presenter: _____

Evaluator: _____

Listen to your partner read his / her letter to Yukina and evaluate their presentation.

1. Your partner has talked about the following things:

①彼女の詩「命」が刺繡ししゅうされたキルトを受け取ったこと。 [○ ×]

②そのキルトを作った人たちと作った理由について。 [○ ×]

③そのキルトを受け取った後、自分は何をしたか。 [○ ×]

④そのキルトを受け取って、自分は何を感じたか。どう感じたか。 [○ ×]

2. Your partner was just like Yukina's mother reading the letter to Yukina. [◎ ○ △ ×]

3. Your partner read the letter clearly enough for you to understand it easily. [◎ ○ △ ×]

4. Your comments:

.....

.....

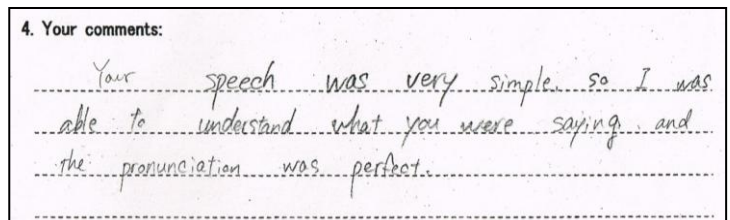
.....

.....

【資料3 発表の様子】



【資料4 生徒のコメント例】



(4) アンケートによる生徒の達成状況（自己評価）の把握と考察

単元終了後に、担当する2学級の生徒(各40名、計80名)を対象にアンケート調査を行った。項目は、単元目標の達成度合いを自己評価させるものに加え、仮説の検証のために、「手紙の発表が堂々できたか」と、「英語表現力が向上したか」についても質問した。結果は資料5のとおりである。

【資料5 アンケート結果】

観点	質問項目	評価基準	A組 (人)	B組 (人)	計 (人)	%
ア コミュニケーション への関心・ 意欲・態度 について	①答えの確認や暗唱活動、発表などで、積極的にペアワークに取り組むことができた。	良くできた	20	13	33	41.25
		まあまあできた	20	22	42	52.50
		あまりできなかった	0	5	5	6.25
		できなかった	0	0	0	0.00
	②Part 1に出てきたクラスの生徒たち、由貴奈さんと友人、母親の心情などについて、積極的に読み取ろうとした。	良くできた	17	13	30	37.50
		まあまあできた	20	21	41	51.25
		あまりできなかった	3	6	9	11.25
		できなかった	0	0	0	0.00
イ 外国語表現 の能力につ いて	①本文の内容に基づき、由貴奈さんの母親になったつもりで、送られてきたキルトについて報告する手紙を、由貴奈さんに書くことができた。	良くできた	14	9	23	28.75
		まあまあできた	20	18	38	47.50
		あまりできなかった	6	13	19	23.75
		できなかった	0	0	0	0.00
	②この手紙を、由貴奈さんに語りかけるように音読することができた。	良くできた	3	3	6	7.50
		まあまあできた	16	9	25	31.25
		あまりできなかった	19	27	46	57.50
		できなかった	2	1	3	3.75
ウ 外国語理解 の能力につ いて	①Part 1に出てきたクラスの生徒たち、由貴奈さんとその友人、母親の心情などについて、読み取ることができた。	良くできた	15	9	24	30.00
		まあまあできた	24	26	50	62.50
		あまりできなかった	1	5	6	7.50
		できなかった	0	0	0	0.00
	②他の生徒の発表を聞いて、正しく理解し、英語で感想を伝えることができた。	良くできた	3	2	5	6.25
		まあまあできた	18	19	37	46.25
		あまりできなかった	15	14	29	36.25
		できなかった	4	5	9	11.25
エ 仮説の検証	①Lesson 4を学習する前と比較して、音読、暗唱、発表の活動を通じて、自分の英語表現力が向上した。	向上した	10	9	19	23.75
		まあまあ向上した	22	20	42	52.50
		あまり向上しなかった	8	7	15	18.75
		向上しなかった	0	4	4	5.00
	②この手紙を音読するときに、堂々と発表することができた。	良くできた	11	1	12	15.00
		まあまあできた	21	18	39	48.75
		あまりできなかった	8	21	29	36.25
		できなかった	0	0	0	0.00

「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」については、ア①、②から、生徒の授業に対する取組と積極的な読み取りをしようとする態度は良好であることが分かり、目標はおおむね達成できたと言える。

「外国語表現の能力」のイ①については、7(2)で述べる。イ②については、生徒の達成度合いが著しく低くなっている。これは、生徒が「演じる」ことに慣れていなかったことが原因であると考えられる。手紙が出来上がった後の音読練習や発音練習には熱心に取り組んでいたが、母親が由貴奈さんに語りかけるように音読することは「照れ」もあり、難しかったようだ。このような表現力を苦手とする生徒は多いので、根気よく指導を続けていきたい。

「外国語理解の能力」については、ウ①は良好であった。しかし、ウ②については、約半分の生徒が達成できていないと感じていることが分かった。授業中の観察では、発表を聞く態度はよく、相手の発表を理解することもできていたようだが、感想を英語で書くことが難しかったと思われる。褒めるときの表現や理解を示す表現などを紹介し、定着させていきたい。

7 成果と課題

(1) 仮説1の検証

登場人物の心情を積極的に読み取ろうとしたかというア②の質問に対して、「良くできた」と回答した生徒が37.5%、「まあまあできた」とした生徒が51.2%おり、合わせて88.7%の生徒が肯定的な回答をした。また、実際に読み取ることができたかというウ①の質問に関しても、「良くできた」が30.0%、「まあまあできた」が62.5%で、92.5%の生徒が肯定的な回答をした。このことから、段階的な問いの工夫をすることにより、生徒が積極的に内容理解をしようと努め、また、筆者のメッセージや登場人物の心情を読み取ることができると分かった。

(2) 仮説2の検証

6(3)でも述べたとおり、今回のアウトプット活動では、生徒が書く手紙の内容を指定し、その手紙がそのまま本文の要約にもなるよう工夫した。その結果、時間内に手紙を完成できなかった生徒は、皆無に等しかった。添削の必要はあったが、ほぼ全ての生徒が、読んだ内容に基づいてまとまった分量の英語を書くことができた。

生徒の自己評価では、指示された内容を含めた手紙を書くことができたかというイ①の質問について、「良くできた」と「まあまあできた」を合わせた肯定的意見が76.25%であった。このことから、まとまった分量を書くだけでなく、内容的にもある程度満足いくものが書けていたようだ。

また、音読・暗唱・発表により英語表現力が向上したかというエ①の質問に対して、「向上した」と回答した生徒が23.75%、「まあまあ向上した」とした生徒が52.5%おり、合わせて76.25%の生徒が肯定的な回答をした。本文やワークシートを見ずに由貴奈さんへの手紙を書く活動があることを何度も伝えておいたため、本文の暗唱に積極的に取り組んだ生徒が多かった。そして、実際に本文を見ずに手紙を書き、音読練習をし、発表するという活動ができたことで、英語表現力が向上した、と答えた生徒が多かったと思われる。

しかし反面、イ①、エ①ともに、約4分の1の生徒が否定的な意見をもっていることも注目に値する。これらの生徒は英語に苦手意識があり、英語を覚えること自体が困難だったことが原因の一つであると考えられる。この点については、7(4)で詳しく述べる。

これらのことから、まだ具体的な手だてには改善の余地はあるが、単元で示される英文を確実に理解した上で、繰り返し音読練習や暗唱をさせれば、「自分のものとして使える正しい英語」の量が増え、多くの生徒の英語表現力が向上することが分かった。また一方、暗記や暗唱だけでは全ての生徒の英語力を伸ばすには不十分であり、別の指導方法を考えていく必要があることも分かった。

(3) 仮説3の検証

自分が書いた手紙を堂々と発表ができたかというエ②の質問については、学級間の相違という興味深い結果が得られた。A組の方では、「良くできた」は27.5%、「まあまあできた」が52.5%で、肯定的意見が80.0%であった。自由記述においても「本文をまねて作ったので、自分の書いている文が理解しやすかった。また、先生の添削があり、直すことができたので、堂々と発表することができた」というような意見が多く記されていた。

一方、ほとんど同じ方法で授業を進めていたにもかかわらず、B組の方は、肯定的意見の生徒は47.5%しかおらず、「あまりできなかった」と回答した生徒が52.5%と過半数を占めた。B組の生徒の自由記述欄には、「自分が書いた文章が正しいのか自信がもてず、堂々と発表できなかった」という記述が多数見られた。私としては、どちらのクラスも同様に添削したつもりであったが、B組の生徒

は添削を受けた後の自分の文章にあまり自信がもてていなかった。もう少し丁寧に指導する必要があったと思われる。

これらのことから、正しいと自信がもてる英文を、練習時間を十分に与えてから発表させれば、生徒が英語を堂々と話すことができることが分かった。逆に、英文の正しさに自信がもてないときの生徒の抵抗感は、相当強いことも分かった。

(4) 今後の課題

本研究で立てた仮説はほぼ妥当であると考えられるが、改善すべき点も多く見つかった。特に7(2)で述べたとおり、英語に苦手意識があり、英語を覚えること自体に困難を感じる生徒には、今回の活動はあまり有効ではないことが分かった。

また、仮説3の「堂々と発表する」ことについては、「英語の発音に自信がもてないため、堂々と発表できなかった」という記述も目立った。十分な音読練習をさせてきたつもりであったが、発音が得意でない生徒の苦手意識は想像以上に強いことが分かった。

これらの問題点を解決するためには、授業をさらに実践的な活動の場に変えていく必要があると考える。つまり、音読や暗唱に過度の時間を割くのではなく、「生徒が自己表現のために英語を使用する機会」を十分に与えることの方がより有効なのではないか。そのような場面を多く取り入れることで、生徒は常に英語を使うことが求められるため、表現の正確さについては曖昧さを抱えながらも、意味内容を伝えることの方が重要だと気付くはずである。また、生徒自身が「使えるようになりたい」と感じる表現に注意を払い、それを使ってみることでインテイクする、という実際の言語習得の場面に近い流れが出来上がると考えられる。

さらに、発音が苦手な生徒には、その改善に向けた指導ももちろん行っていくが、自分の英語でも相手に伝わるという経験を積み重ねさせることで、英語を話すことに対する不必要な抵抗感を軽減させることができるだろう。また、相手にうまく伝わらなかったときには、何が問題だったのかを自ら考え、次の活動時にはうまく伝えることができるよう、自発的に学習していく態度も身に付けられるのではないか。

具体的には、読んだ内容に基づいて、自分ならどうするか、自分はどう考えるか、という問いを毎回の授業で生徒に投げかけ、ペア・ワークやグループ・ワークで意見を述べさせ、議論させることなどが考えられる。また同時に、自分がなぜそう考えるのかも述べさせることで、論理的思考力も養うことができるだろう。

今後このような内容を取り入れた授業を実践し、生徒の変容を見ていきたいと考えている。

8 おわりに

アンケートの自由記述の中で、印象に残るコメントがあった。それは「ペアの相手がしっかりと聞く姿勢を示してくれて発表しやすかった」というものであった。コミュニケーションとは一方的なものではなく、双方向的なものである。話すことや書くことなど、発信することの重要性が強調されることが多いが、真剣に相手の言うことを聞く態度も同様に大切であることを改めて認識した。

最後に、英語科内のチームワークについて、その重要性を強調しておきたい。いよいよ来年度の1年生からは新学習指導要領に対応した新しい教科書を使用することになる。その内容について事前に英語科教員全員で話し合い、新しい授業方法とワークシートなどの教材を共同で作っていく体制が理想であるとする。そして一度使った教材については、反省をもとに改良を加えて次年度に再び使用するというシステムが出来上がれば、よりよい授業方法とよりよいワークシートが引き継がれ、学校

の財産となっていくはずである。そのような体制の構築が、授業改善とともに我々に求められている。

多くの生徒にとって、日常生活の中で英語に接する機会はきわめて少ない。そのような状況の中で、英語によるコミュニケーション能力を伸ばしていくためには、英語の授業をより実践的なものに変えていく必要がある。本校でも今回の研究を通して見えてきた新しい可能性に向けて、英語科全体で協力し、さらなる授業改善を進めていきたい。

参考文献等

- 文部科学省『高等学校学習指導要領』平成 21 年 3 月告示
- 文部科学省(2010) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』
- 愛知県総合教育センター(2005) 『授業の手引き 高等学校 英語』
- 磯田貴道(2010) 『教科書の文章を活用する英語指導—授業を活性化する技 108』 成美堂
- 今井康人(2011) 『スーパー英文読解 英語を自動化するトレーニング 基礎編』 アルク
- 今井康人(2012) 『スーパー英文読解 英語を自動化するトレーニング 応用編』 アルク
- 卯城祐司編著(2011) 『英語で英語を読む授業』 研究社
- 大井恭子編著(2010) 『パラグラフ・ライティング指導入門』 大修館書店
- 岡部幸枝・松本茂編著(2010) 『高等学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』 明治図書
- 金谷憲編著(2011) 『高校英語授業を変える！ 訳読オンリーから抜け出す 3 つの授業モデル』
アルク
- 齋藤榮二(2011) 『生徒の間違いを減らす英語指導法—インテイク・リーディングのすすめ』
三省堂
- 高島英幸(2000) 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』
大修館書店
- 高島英幸(2005) 『文法項目別 英語のタスク活動とタスク—34 の実践と評価』 大修館書店
- 高島英幸(2011) 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』
大修館書店
- 田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸編著(2011) 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導—
深い読みを促す英語授業』 三省堂
- 和田玲(2009) 『5 STEP アクティブ・リーディング』 アルク

